

吉舎の「ねこめし」

碓井 静照

2008年秋、三次（広島県）に行ったついでに、吉舎（きさ）まで足を伸ばした。吉舎はその昔、承久の乱（1221年）のおり、幕府によって隠岐に配流された後鳥羽上皇が立ち寄って「よき舎（やどり）かな」と云われ、名がついたという。

吉舎の町並みは小さな川を挟んで、昔の酒屋の土倉、米屋、豆腐屋、反物屋の商家、旅館、寺、神社、辻八幡などが新建築物と混在している。それほど高くない山際は松などの針葉樹に覆われ、溪谷は深い陰をつくる。川面は白く光り、黄金色に輝く稲田は秋風に重く揺れ、収穫が近いことを知らせる。山手にはいくつかの穴があり、昔は石見銀山ならぬ吉舎銀山として知られていた。銀山街道の近くに「まむし」の養殖場があり、稲田のあぜみちの朽ちかけた彼岸花が夏の面影をとどめている。

戦国時代のはじめには和智氏を中心に栄え、和智誠春（わかまさはる）は毛利元就に忠実な武将でもあった。しかし、毛利元就父子が尼子晴久、義久と月山富田城での合戦中に長男隆元の急死という事件がおこり、和智誠春は元就から隆元の毒殺にかかわったと疑われて窮地に陥った。

隆元の死因は和智氏の饗応のおりにでた鹿の肉が当たった、食中毒ではないかとの説が流れている。当時、吉舎には庄原、頓原、備後落合、上下、神石から、牛肉、馬肉、猪の肉と共に、鹿の肉も運びこまれていた。しかし食中毒にしては、急激な死に方なので判断は難しい。

和智家は元来、民衆に厚い統治をしており、毛利家にもよく従っていた。関が原の戦い、秀吉の朝鮮半島への遠征のおりにも、和智広世をはじめ村人からなる兵を出した。あいにく吉舎からの兵は敗れ、火攻めにあい横死を遂げた。

吉舎の辻大谷の火室（ひむろ）明神では、明治まで珍しい神事が行われてきた。たいまつを持った4人の神楽人がたいまつをかざしながら舞い、祭りの頂点になると4人は気を失い、火を撒き散らせながら衝撃的に卒倒する。この舞の倒れ方は朝鮮半島の痛哭に通じるものがある。

吉舎、国丸神社の八杯講も朝鮮にちなんだ伝説がある。やはり秀吉の朝鮮半島遠征のおり、兵としておもむいた村の若者たちは食べ物がなくて餓死した。これを慰めるため、村人

が腹いっぱいご馳走を食べる神事である。

このほか数々の神社、祠、土地の風習があり、良(う)しとら)神社は村の東北に位置し悪霊の侵入を防ぐ。

ところで私はかつて酒席の余興にふざけて、素人狂言「松茸狩り」を演じたことがある。神主の着る白いかすりに袴をはいて宴席に現れ、袴をひきずり、高らかに吟じたものである。「松茸狩りに行くこ

る。松茸狩りに、おう、ここに小さな虫くいの松茸がある」と客の股間あたりに手を入れ、もぎ取る真似をするといった案配である。

吉舎の町の通りには、昔ながらのかつおをかけた「ねこめし」と、さつまいものくきの煮付けのある店がある。とてもうまい。

カット・筆者

(了)

冬季号の原稿募集要項

締め切り
1月8日

◇これまで、干支で“年男・年女”に当たる会員に随想を寄せてもらうよう、お願いしてきました。今回は、八十歳以上の方々には「今年の抱負」をお願いします。400字詰め換算で、2〜3枚程度。大勢の方からの投稿をお待ちします。

◇医家随想は従来どおりです。テーマは自由。年内に届いている数編は、近日中に入力したゲラ刷りをお届けします。

◇医芸俳壇、歌壇、柳壇もどうぞ。各5句、5首。

春季号の原稿募集要項

締め切り
4月6日

◇新体制のスタートに相応しい随想を望みます。年間4回、文芸特集号を含めて5回発行を予定しています。できるだけEメールによる投稿をお願いします。もちろん、従来どおり封書やはがきでも受け付けますが、新投稿規程(◎頁)をご理解くださいますように。

クラゲ」を飛ばす大道芸人



安彦 洋一郎

私は毎年、年末年始は山形の蔵王温泉に一週間滞在し、スキーを楽しんでいます。本年だけは自宅を過ぎました。しかし元旦だけは「港の見える丘公園」に出かけ、御来光を仰いだ。空は快晴、美事に輝く太陽を見ることができた。

日が上がると大勢の人々は公園を去っていった。そこでは持参してきた凧を揚げた。凧を揚げるのは小学生の時だったので、七十年ぶりである。

ゲーラ凧

私の小学校時代は、正月と云えば「凧揚げ」「独楽回し」「竹馬」、家では「双六」「トランプ」「花かるた」などで遊んだものである。

私の家は保土ヶ谷の高台にあったので、近くに「原っぱ」があり、「凧揚げ」には絶好の場所であった。学校から帰ると愛用の「うさぎ凧」を空中高く揚げ楽しんだ事を思いだす。

戦前、日本で揚げられる凧は和凧のみであったが、戦後は洋凧が輸入され、都会では洋凧が主流になった。その代表的なものは「ゲーラ凧」である。この凧は「とんび」の様なデザインで糸目は一本で最も単純な設計でできている。折られたため一本の棒になってしまう。

私は三十年前、劔岳蚕山にこれを持参し、二九九八米の山頂で揚げたことがある。私は凧を揚げてみて、山頂の乱気流の激しさを初めて知った。揚げるのに大分時間がかかった。百米上空は気流が安定していた。

現在、私は毎週横浜の「みなとみらい」の「臨港パーク」に通い「ゲーラ凧」を揚げている。この凧は微風でも簡単に

揚げられるので風力を知るのには好都合な風である。順風に
乗った風はぐんぐん上昇する。五十米、百米と上昇すると次
第に風の姿は小さくなる。上空は風が強くなってきた。糸車
は「カタコトカタコト」と音をたてながら回転する。二百米、
三百米と糸は伸びる。風の影は点となってしまった。更に糸
を伸ばし四百米まで伸ばした。私の眼では見えなくなった。
そこで糸を止めた。

レンボー風車風

この風の正式名は「スピントックス」と云って米国製であ
る。「レンボー風車風」は私がかつてに付けた名前である。こ
の風は六角形の円筒形で日本風の「アンドン風」によく似て
いる。翼に「スピン」がかかっているので風車の様に回転す
る。この風は強風でないと思われない。

或る日曜日「山下公園」に出かけてみた。日曜とあって大
勢の人々が散策していた。私は風を待っていたが、なかなか
よい風がこなかった。強い風がくるまで「のんびり」待つこ
とにした。

散策する人はさまざまである。「二人連れ」「親子連れ」「ベ
ット連れで散策する人」「ジョギングをしている人」「外国人
いろいろ」それに「旅行社の団体」など、公園を散策する人
を見ているとおもしろい。

暫くすると突然強風がきた。その瞬時をのがさず風を飛ば
した。風は風に乗って「くるくる」と回転しながら上昇した。
ここぞとばかり糸を伸ばす滑車は音をたてながら回転した。
三十米揚がったところで止めた。これ以上上げると眼に止ま
らなくなるからである。通りがかりの人に声をかけられた。
「珍しい風ですね。私は初めてみました」

又、次の人は「変わった風ですね。くるくる回って面白い
風ですね」と声をかけられた。私にも引かせて下さいと云わ
れた。私は風糸を手渡すと「あゝ、こんなに引きが強いんで
すね」と感想をもらした。

風車風は風の強さに応じてその回転を増す。

空中に飛ぶ回転風は人目を引いた。知らぬ間に十人くらい
の人が集まってこの風を眺めていたのに気づいた。

クラゲ風

私は以前に「私の心をクラゲに託して」と題してと、モチ
ーフを「クラゲ」に求め、数十点の画を描いた事がある。パ
リの上空、ドイツ、ドレスデンの空、そして蔵王の雪山の上
空に飛ばした事がある。これはあくまでも私の夢であった。

しかし、今年、風揚げに凝つてから「クラゲ」を天高く飛
ばしてみようかと思った。果たして飛ばか飛ばないかわから
ないが、「クラゲ風」を作ってみようかと試作にとりかかった。

新・投稿規程

(来年4月号から摘要)

「医家芸術」発行の諸費用を、投稿者がいくらかでも負担するよう秋季号のクラブ通信で、お願いをしました。そのあらましを以下に記します。

①ページ負担金 2ページまでは従来どおり無料。それを超えた分は1行あたり100円を申し受けます。

②入力について 原稿は手紙やFaxなど手書きのケース。1ページ(18字×22行×3段≒400字詰め原稿用紙3枚)あたり750円(値下げ)にします。

③Eメール送稿及びワープロによるプリントの場合は無料とします。

④編集部からの執筆依頼原稿は無料。

※注1) 原稿量には写真やその他の画像も含まれますので、ご注意ください。

注2) 料金清算は、発行時にその都度行います。

文芸特集号

読后感想文を募ります

随筆や創作、評論、そして詩歌(川柳も含めて)……筆者諸氏のご協力で、本年最後の医家芸術を飾ることができました。それぞれ、味わいのある作品です。取り上げる対象は1編でも、何点か合わせても自由です。

読後の感想をお寄せください。締め切りや原稿量は特に設けません。

最初の第一作は重量が重すぎて揚がらなかった。第二作は少し軽くしたので浮き上がった。しかし小さいので迫力がなかつた。そこで第三作目は三米の「大クラゲ風」の作製にとりかかった。大きくなると強度の計算、重量の計算が必要となる。素材は服の裏地、骨は模型工作用の竹ヒゴ、軽い木材を使用した。

試行錯誤しながら漸く出来上がった。

強風の北風が吹く或る日曜日、横浜の山下公園に出かけてみた。最初は小さな風を揚げてみた。強風に乗って一気に一〇

〇米まで揚がった。これではいけるとばかり、「大クラゲ風」を強風に乗せて一気に飛ばした。一〇〇米のところまで止めた。クラゲの足は強風にたなびき「ヒラヒラ」と舞った。公園を散策する人は天空を仰ぎあの風は「クラゲ」ですかと声をかけてくる。足が「ヒラヒラ」しているので「クラゲ」とわかつたのだらう。いつの間にか数十人の人々に囲まれていた。又夕暮れには「発光ダイオード」を点滅させ「クラゲ螢」として大勢の人々に見ていただいた。

(了)

我が青春

文と詩歌による回想

古賀行雄

プロローグ

後期高齢者、この忌まわしい名称に、私はこの頃かなりのシヨックを受けている。

自分ではまだまだ若いつもりでいたのに、此の手ひどい烙印が私の気力や敵愾心をしたたかに打ちのめし、未来への希望も夢も急速にしぼんでしまった。確かに記憶力や視力の衰えが読書力を奪い、一冊を読み上げるのにも数日を要する始末。

特に、創作意欲や文章の作成に至っては、そうでなくても自信が無いのに、今まで投稿したもまで全てしらけて見える。

学生の頃、一生に一度でもいい、自分の書いたものを是非活字にしたいと、熱い思いにかられたものだ。今となつては出版された本でさえ、自分の無能力をさらけ出すだけだった

と気づく。しかし学生時代から書き溜めたものを、今更捨て去るには未練が残る。ここで吐き出す意外に、後期高齢者の抵抗のはけ口はないように思えた。

勿論幼稚で独りよがりな日記や詩や和歌の類いである。「一家芸術」に投稿できるのも今年が最後かもしれないし、恥の上乗りになるかもしれない。

同人の皆さんに読んでもらえなくても、自己満足に終わればそれでも結構、紙上を汚すことをお許し願いたい。

幼少の頃

雨のしよぼ降るある日の事、恐らく喧嘩でもしたのだろうか。近所の腕白小僧どもが、手に手に棒ぎれや小石をもって幼い私を追っかけてくる。私が、夢中になって家の中に逃げ込んだ。そこはお屋敷のお嬢さんのお宅だった。

腕白小僧たちは、棒ぎれや砂、小石など雨あられのように家のなかにほうり込んで来る。その縁側に屋敷のお嬢さんが立っていた。

恐怖にかられた私は、そのお嬢さんに抱きついた。お嬢さんは私をかばいながら、小僧たちを激しく叱りつける。小僧たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。

今でも、時々夢の中に出てくるその光景は、映画の一コマのようなシーンであるが、一人息子だった私には心温まる思

い出であった。

自分が養子で、実の兄弟姉妹が六人もいる事を後で知らされたのだが。

その頃、私の家は温泉街の街外れにあつて、養父は産婦人科医院を開業していた。

私の住居の先隣に、鮎屋さんがあつた。

私はよちよち歩いて、よくその鮎屋さんを訪れた。鮎屋のおじさんが仕事の合間に、黒砂糖を包んだ鮎を手のひらにのせて、ひよいと口の中に放りこんでくれる。その味が今でも忘れられない。

道路に面した土間がそのままおじさんの仕事場で、練り上げた一抱えの鮎のかたまりを、柱に釘づけされた横棒にひっかけて、両手で引き伸ばす。伸びた鮎を折り曲げては横棒に戻して又引き伸ばす。時には両手にツバをつけながら、何回も何回も繰り返す仕草が、幼い私には大変面白かつた。

最後に、白い粉をまぶした部厚な板の上に、長く伸びた鮎の塊をどざりと載せた。平らにならした鮎を、刃物でちよんちよんと切りはなす。その一切れ一切れをオブラートに包めば、短冊形の（あめがた）の仕上がりである。

この近郷では、嫁に（あめがた）を与える良く乳がでると言う評判で、妊婦へのお土産に買っていく人が多かつたそ

うだ。

その家には秀ちゃんと言う二歳年上の男の子がいた。裏庭には、井戸があり洗い場があつた。私はその洗い場で足を滑らして、俯けに這ってしまった。私は、慌ててはい上がるうとするが、足がツルツル滑って起き上がれない。秀ちゃんたちはその姿が面白かつたのだらう、手を叩いて囃し立てた。

私は、早く起き上がらねばと必死にもがいたに違いない。しかし力つきて腹這いになったままワンワン泣き出してしまった。そのうちに秀ちゃんの兄が、やつと助け起こしてくれた。その兄さんは、私が成人してからまで、面白がつてその話を聞かせてくれる。

その時の恐怖も、その後悪夢になって、夢の中で時々私をおびやかすようになった。

私の家の右隣と左隣には私と同年の娘の子が住んでいた。その娘たちとは仲良く遊んでいたらしい。ままごとでは、私が医者でその娘たちが患者になったり看護婦になったりしていたそうだ。

国道に面した石の門柱には古賀産婦人科医院と表札がぶら下がっていた。その側には国道に沿つてどぶ板で覆われた細い溝が続いていた。そのどぶ板を踏んでいろんな物売りが行き来する。自転車に乗った豆腐屋さんがラツパを吹いて、魚

屋さんや野菜屋さんはリヤカーを引つ張って、時々焼芋屋さんや石焼芋を売りに来る。キセルの付け替え屋さん、こうもり傘修繕、面白かったのは割れ物修繕屋さん、異国人みたいだった。

割れた陶器の大火鉢のかけらに、尖った錐の先をぐるぐる回しながら、割れ目に沿って小さな穴をいくつもあけていく。弓のようなバネ仕掛けでぐるぐる錐を回すのが大変面白かった。最後にその穴に真鍮の釘を打ち込み、二つのかけらをきれいにつなぎ止める。たちまち大火鉢がもとの姿に復元される。幼な心に、それが奇術のように思えて、熱心に見入っていたものだ。

当時国道は勿論舗装されていなかった。その往還を時々乗合自動車（バス）が通る。道端に小旗を立てて置くと、伊万里行きの定期バスが家毎に停まって客を乗せてくれる。だから、私はかなり幼い頃から、一人で隣村の母の実家に行かされていたようだ。

時々馬車が行がら音を響かせる。馬車かつつあん（馬車ひき）が手綱を肩に回して颯爽と先頭をきって歩く。車輪が音を立てると、悪童たちが荷車の尻にぶらさがって歓声を挙げる。馬車かつつあんが振り向きざま「こらっ」とどなる。悪童達はみずつばなを垂らしながらどっと手を叩いて喜ぶ。

国道を隔てて畑があり、その先を国鉄佐世保線が通って

る。車体の腰に赤線を帯びたのが三等車、青線が二等車、そして最後尾に郵便車が続いていた。郵便車の窓から車掌さんが手を振ってくれる。悪童達に混じって私も必死に汽車を追いかけて手を振ったものだ。

私の養父は、後にニコチンとアルコールですっかり体を壊してしまつたが、その頃はまだ元氣盛りだった。

かなり遠方まで往診していたようだが、患者からの要請があれば、泊りがけで妊婦を看護していたそうだ。往診には貸し切り（今で言うタクシー）を利用していった。医院を新築移転してからは、車夫を雇って人力車に乗ったり、オートバイを運転したり、最後にはダットサンと言う小型の乗用車のハンドルを握っていたが。

私たちの旦那寺の邦雷和尚は、「私の家内が難産で苦しんでいる時、お父さんの学好（はるよし）さんは三日三晩泊り込んで治療してくれた。結局は親子とも駄目だったが、本当に良くしてもらった」と、父が亡くなってからしみじみと話してくれた。そしてその頃は、お茶がわりに茶碗酒をふるまつたものだーと。

父は、もともと酒豪ではなかつたらしい。しかし最初結婚した新妻が難産で亡くなった、生れたばかりの赤ん坊も一緒に。すっかり気落ちした父は、それから少しづつ酒を覚え、

たしなむようになった。そこに、現在の母（芳枝）が後妻に入った。押しかけ女房だったそうだ。その母もやがて不妊症になり、妊娠の望みはなくなった。祖父のはからいで、学好の次兄良一の三男だった私を、乳飲み子の時に、その母が強い引に引き取ったそうだ。

父は幼少の頃、農村の谷間に育っていたので、川での魚釣



りが好きだった。開業してからも、暇さえあれば秀ちゃんやその兄たちを連れて、魚釣りに出掛けたものだ。後年、その兄弟達が懐かしそうに話してくれた。

少し長じてから、私も父に連れられて、川に行ったことがある。

父は、糠味噌をこねてだんごにし、村への往診途中に橋の上から川にふり撒く。帰りがけに橋の上から投網を投げて、鮎や鯉を捕らえるのが楽しみだった。

梅雨時の川の水が増えている頃は、小川に竹で編んだ細長い籠をしかけて、魚や川蟹が入るのを待った。

その竹籠を引き揚げるのについて行った時、魚や蟹の代わりに、一匹のマムシが入っていた。その時の肌寒い思いが今も甦る。

父が町の中に医院を新築して移転してからは、往診からの帰り道、よく立ち寄るところがあった。

西の国道はたの安さんの家である。安さんはその国道沿いで自転車を営んでいた。父はその安さんとへぼ碁をうつつこともあれば、酒を飲んで遅くなることもあった。母はそれをいつも苦々しく思っていた。父の帰りが遅くなると母は機嫌が悪く、ヒステリックに奉公人や看護婦たちに当たり散らした。父もそんな母から一時的にも逃れたい心境だったのだろう。

父が真つすぐ帰って来た時は、母は機嫌よく燗をつけて父をねぎらっていた。

父の好物は大羽鯛の煮付け、刺身は苦手で、金網で焼いてからしか食べなかった。私を膝の上に乗せて、ちよびりちよ

びり杯を傾けながら、時々魚の身をつまみでは私の口にほうり込んでくれる。

そう言う父が私は好きだった。母は私を早く寝せつけようとする。しかし私は眠くないと駄々をこねて頑張ったものだ。

母がヒステリックになるのが私は本当に嫌だった。安さんが遊びに来て酒盛りが始まると、宴は果てしない。母やいらいらしながら私たちを意味もなく叱りつける。奉公人に命じて箸を逆さに立ててタオルをかけさせる。客が早く帰る為のおまじないだった。

ある晩、私は幼な心に一計を案じた。小学校の二年生ぐらいだったろう。

居間の階段下の箆筥に、一本の日本刀が隠されている事を知っていた。安さんの長居が続いた夜、私はその箆筥からそつと日本刀を持ち出そうとした。長居の客を脅して早く帰ってもらおうとしたのである。それに気づいた父や母はさすがに驚いたらしい。

客は早々と引き上げ、泣きじゃくる私を父も母も呆然と見つめていたようだ。

小学時代

小学二年生の時、母は私をむりやり、武徳殿と言う街の剣道道場に連れて行った。そこは鈴木寅彦先生と言う小柄な先

生が道場主だった。礼儀作法やごく基本的な竹刀の使い方を教えてくれる。私はあまり興味はなかったが、通わないと母から激しく叱られる。

先生は一人住みだった。帰りがけに出席簿の名前に墨のついた筆尻で丸印を押す先生の姿が思いだされる。機嫌がいい時は、裏庭の琵琶の樹からちぎった琵琶の実を、手のひらに乗せてくれる。手入れしてない琵琶の樹には、小さくろろずんだ琵琶がたわわに実っていた。あまり甘くはなかったが、それでも子供たちは喜んだ。

小学四年生になると、それからが大変だった。小学校で本式の剣道少年に仕立てられたからだ。学校では渋谷慶蔵先生という、厳しい剣道の先生に教わることになった。

その頃、私たちの小学校は、京都の全国大会で優勝を重ねるほど、剣道の有名校だった。連日厳しい稽古が続いた。朝は学校が始まる前の一時間、昼休みは弁当をすましたら直ぐに道場に走った。授業が終わると、夕方暗くなるまで稽古だった。下級生の指導には、高等科の生徒たちが当たった。その先輩たちは、一人に何人かの下級生が割り当てられ、その後輩がうまくならないと、その先輩たちが激しく叱責される。だから上級生の指導も厳しかった。

渋谷先生の指導は、まさに体罰そのものだった。癖が悪いと、ありあわせの竹刀で容赦なく打ちすぎる、竹刀がグシャ

りとなる程。だから回りの生徒達は自分の竹刀をとられぬように、急いで体の後ろに引込めていたものだ。夏休みもなく冬休みもない連日の猛稽古で、へとへとになるまで鍛えられた。だから、県内の学校には向かうところ敵なしの有様だった。

小学校の六年生のときに、京都で行われる全国大会に出場した。白いかすりの着物に袴をつけ、白緒のついた高下駄に学帽、防具を担いで父兄たちに見送られながら貴社に乗り込む。

京都の武徳殿での団体戦では、私が大將になって出場した。その頃はまだ珍しかった赤銅をつけて。負けるとどんな叱責がまっているかと思うと必死だった。それだけに、勝てて優勝した時はほっとしたものである。

開戦から終戦前後

昭和十五年旧制中学に入学。二年生のとき、ある晩、校舎が全焼した。朝の朝礼で、校長先生の頭が一晩で真白になった感じがした。生徒による放火だったらしいが、真相は判らずじまいだった。

学校の火災のあと、急遽分散授業が始まった。一年生は旧制高女の講堂で、私たちは遊郭街の丘の上にあった公会堂で。編上靴にゲートルを巻き、隊伍を整えて、毎朝その遊郭街の

中を行進して丘に登った。授業が始まる頃、丘の下からのんびりした三味線の音が聞こえてくる。その音に耳をふさぎながら授業を受けねばならなかった。

昭和十六年十二月八日、焼け跡の校庭で校長先生から真珠湾攻撃と米英に対する宣戦布告の話を聞き、身の引き締まる思いがした。

私は、受け持ちの先生の強い勧めで海軍同志会に入会させられた。当時、予科練か、陸軍士官学校か海軍兵学校を志望せねば、軍事教官から国賊よばわりをされる時代だったからだ。

間もなく新校舎が完成した。アメリカからの最後の輸入材が手に入り、やっと新築できたと言う。

昭和十九年、第二次世界大戦の末期、父が四十九歳で軍医として召集された。私が中学五年生の時である。酒とタバコでぼろぼろになっていた父は、サーベルを下げて歩くのもやつとで、町の人に見送られながら駅に向かった。駅頭では万歳の声が車内までどよめく。

父はよろめきながら久留米連隊の門をくぐった。その連隊まで私も付き添って行つたが、身体検査で父は即日帰郷を命ぜられ、戦争に参加することはなかった。しかし父は「万歳、万歳」と町民に送られた手前、真つすぐ家に帰るのは余程辛

かったのだろう。そのまま家に帰れず、県内の温泉宿で数日暮らし、さらに本家にしばらく逗留した後をやっと家郷に帰って来た。

その年、私は旧制高等学校の受験に失敗した。幸い九大付属医専には合格できたが。当時、学徒出陣で法文系の学生はほとんど兵役についていた。私たちもそれ以上の浪人生活は望むべくもなく、おまけに父は一刻も早く私が医者になることを望んだ。

昭和二十年、私の実妹の伸子（良二の三女）が京城女子医専に合格した。まさに終戦の年である。朝鮮海峡にも敵の潜水艦が出没していて、一触即発、商船といえども撃沈される可能性があった。

半島人と思える多数の男たちに混じって、伸子は博多湾からたった一人で乗船した。私は大丈夫かなと危惧しながらも手を振って別れた。京城にはまだ内地人も沢山住んでいることだし、まさか日本が敗れるとは思ってもいなかった。

そして、その年、博多はボーイング29の大空襲を受けた。私たちは下宿の家族たちと庭の防空壕に身をひそめた。やがて探照灯に照らし出されて数十機のボーイングB29の編隊が腹を赤く染めながら頭上に迫ってくる。貨車の走るような轟音と共に、バラバラと爆弾をふりそそぐ。焼夷弾の束が、花火のように中空で燃えながら博多の空を覆う。一度去った

編隊がまた踵を返して迫ってくる。その度に、交差する探照灯の下で味方の高射砲弾が炸裂するが、敵機の胴体までは遠く及ばなかった。

幸いに、私たちの頭上に落とされた爆弾は博多駅や大濠の西部軍司令部の方に流れて行った。空襲が終わるまで数時間かかったような気がする。博多中が火の海と化した。

翌朝、私は早速、下宿から大学に駆けつけた。大学病院の被害状況が知れたからだ。しかし、驚いたことに、大学の敷地内には一発も爆弾は落ちていなかった。一步、大学の塀の外は、辺り一面焦土と化していた。

私はその焦土を縫って、一時間ほどかけて市街地を通り抜け、学友の無事を確かめに走った。かつての繁華街もビジネス街も瓦礫の山と化し、道を歩くにも難渋した。途中、角帽をかぶった大学生が鍋をぶらさげて、夢遊病者のようにさまよっているのにつかつた。恐らく下宿に爆弾が焼夷弾が落ちて、危うく一命をとりとめたのだろう。

着いてみると、学友たちは下宿でまだ寝についていた。「おい、お前らは昨夜の空襲を知っているのか」と声をかける。

「馬鹿言え、その塀の外を見るがいい」と言う。私が二階の窓から塀の外を眺めると、そこには焼夷弾の筒が山のように積んであった。それは下宿の中庭に束のまま落ちてきた不発の焼夷弾を、友人たちが必死になって家の外にほうり出した

ものだと言う。かれらは、疲労困憊して眠りこんでいたのだ
った。

間もなく、大学のキャンパスは休校になった。学生の大半
が住むところを失って講義どころではなくなつたからだ。

私は、やむなく故郷に帰り家で長い夏休みをとることにな
つた。

その間に、海軍病院の分院を見学することになった。大学
の先輩が海軍委託生だったから、一緒に連れていってもらつ
たのである。

その分院は、里の温泉街にあつた。閉鎖された数軒の遊郭
の待合を利用して、急遽病室に仕立てられた病院だった。主
に、佐世保海兵団関係の水兵たちが入院していた。平和時は、
男たちがその歓楽街に遊び、なまめかしい四畳半で娼婦たち
と一夜の歓を尽くしていたに違いない。その四畳半に呻吟し
ている若い水兵たちは、大半が栄養失調だと聞いた。その中
には、真つ白なご飯にぼろぼろ涙を流しながら、口にほおば
つたまま死んでいく者もあつたという。

正午前その病院本部で、見学を終えて院長に挨拶している
と、その明るい窓を通して真つ青な西空に突然稲光がした。
雷鳴が聞こえなかつたので、随分遠いところに落雷したのか
と思つた。

その日は、実は八月九日、長崎に原爆が投下された日であ
る。時間帯も稲光と丁度一致する。

私は、あの稲光こそピカドンと称された、悪魔の使者原爆
のもたらしたものと、今でも固く信じている。何故なら、そ
の翌日、長崎から逃れてきた婦人が、そのまま私の医院の
病室に入院し、全身点状出血のために血だらけになりながら、
息を引き取つたからだ。

その五日後、運命の八月十五日が訪れる。私は家族らと共
にラジオの前で天皇陛下の玉音放送を聴いた。しかし雑音が
激しく、内容は所々しか聞き取れなかつた。(恐らくロシアが
宣戦布告したに違いない)と皆の意見が一致する。いよいよ
米軍が本土決戦をいどんで来るだろう。私は意を決して大学
に立ち戻ることにした。本土防衛に駆り出される事を予想し
て、その日のうちに家族に別れを告げ、短刀一振り荷物にし
のばせ、すしづめの列車に飛び乗つた。

敵機の襲撃で穴をあけた蒸気機関車は、汽罐から蒸気を吹
き出しながら、走つては止まるのろろ運転だった。棒立ち
になつている車内で、隣に立っていた陸軍将校が、私に低い
声で囁いた。「君は日本が降伏したことを知っているか」と。
私は、愕然として足が震えた。いよいよ国土防衛に駆り出
されるものと覚悟して出発したのに、今更、帰る術もない。
下宿に着くと、近所では占領軍が婦人たちを襲うに違いな

いと、翌日から米軍の上陸に備えて竹槍訓練を始めることになつていた。下宿に入る横道には、いつの間にか不発弾が一発ゴロリと横たわっているのには驚いた。

下宿では、奥さんや子供たちを田舎の実家に帰すことに決めている。占領軍も怖かったが、何よりも食糧難のためだった。私とその家族に付き添って行くことになり、送り届けると、そのまま我が家に帰着する事にした。

その後、博多市内で下宿屋を継続することは無理だった。私も新しい下宿屋を見つける事はできなかった。幸いに大学からの情報で、病院内の学生控室を開放すると言う。

二階建木造建築の階上に三部屋の畳部屋があり、奥の十畳間の一角を私が占めることができた。かつて学生防衛隊で直勤務していた部屋である。勿論、家から持参した食料による自炊だが、昼飯だけは外食券を使って、病院内の食堂を利用できた。しかし給食の高梁米はまずくてなかなか喉を通らない。時には油粕のようなものが、お米に混じっているが、全く消化されず排便の時は、トイレの下で鼠が待ち受けている有様。鼠たちも食糧難だったのだろう。

やがて曲がりなりに、大学の講義が再開された。

翌年、昭和二十一年九月、実父良二が死んだ。会社の不況で経理担当だった父は、神経を擦り減らしていた。遂に会社

も倒産し、父は胃潰瘍の為に全身の衰弱がひどく、とうとう病院のベッドで果てた。その頃養父の学好も動脈硬化症で手は震え、兄と同様に胃痛が激しく医院は休診状態にあった。大学病院に受診しても効果はなく、毎日暗い居間の火鉢の側で重曹をなめながら呻吟していた。

歯科医だった養母の弟も腸チフスに罹り急死した。

父たちの長兄にあたる本家の俊一伯父も老衰で寝たきりである。

親類中どこを向いても病人だらけで、帰省する度に暗いニュースが重なって陰鬱な気分だった。しかし、食料補給と生活費だけは、どうしても母に工面してもらわねばならぬ。

その頃から、私は孤独感に見舞われ、誰にも訴えようのない寂しさを感じるようになった。非力で何の価値もない自分。しかしいつかは家族たちの期待に応えなければならぬ。私の養子としての立場が言いようもない重圧となつてのしかかってくる。

孤独

僕の心が蜘蛛の網にからまれてもがいている

その心の中で

孤独の哀愁が 黒雲となつて広がってゆく

一カ月の夏休みは終わつた
構内の並木はその緑を増し

居室の畳には かびの匂いがしみている
全てのものが

元のままの姿で 僕を迎えてくれる

しかし鉛の魂が 人を恋して泣いている

真つ青な空も 輝く太陽も 私には話しかけてくれない

快なワンピースや

派手なパラソルが

別世界のように私のそばを通り過ぎてゆく

並木にそよぐ風よ 僕に愛のささやきを

緑の木陰よ 僕に安らぎの時を

そして時計よ 暫く時を刻むのを止めよ

僕は孤独

僕は淋しいのだ 人が恋しいのだ

白雲の流れる彼方に

せて美し夢を描いておくれ

老いたる父

父老いて手にする事もなくなりし診療室のメスの光よ
主まさぬ診療室の古びたるカルテ棚のうすき埃よ

老い果てて廃業やむなき父なれど尚決めかねつ医師な
ればなり

耐え難き苦悶の跡の痛ましや今年五十路の髪の毛の白さよ

重湯など吸い難きとて飯を乞う童の如く父は病みにき

腹痛にうめきもだゆる父の背を撫でつつ我も心うずけり

命絶たば楽にならんとつぶやける父の言葉に応う術なし

汝が許に帰りたしとは思えども病の父と別れ難きも

学窓に早く帰れと命じたる父の言葉の低くくぐもる

何げなくいとま告げたる我が声にうなずく父の悲しき瞳

屋上

屋上に夕闇せまる西空の残光わびし老父思えば

夕暮れに煙るが如き志賀の島赤き灯影のかすかに揺らぐ

夕暮れの沖の島影眺むればわびしき思い止むべくもなし

沖の海に白帆が一つ島影に溶け入る如く夕闇迫る

《昭和二十一年七月二十二日の日記》

六時半頃夕飯を焚き付け、やっと食事が終わったころ、未
だ夕陽の残光が大学病院の建物に反映して、かば色に輝いて
いる。建物の洋館と背を競うように高い楠の葉の間から、生
ぬるい風がねつとりと吹き抜ける。

一日の労を終えて、熱風呂をきつと浴びる。その後、一本のタバコを胸の奥底まで吸い込む。軽い疲れを覚えるが、ゆったりした気分が心地よい。風呂は大病院の汽罐場の職員風呂である。終戦後の街は食糧難、下宿難で、仕方なく病院敷地内の学生控室の二階に潜入し生活の場としていた。

昨夜は、十時頃寝についたが夜中の二時頃まで眠れなかった。物凄い蚊の来襲と蚤の出没で、輾転反側、眠れぬ夜を過ごした。

今日、渦巻き蚊取り線香十個を、九円も出して買ったのもその為で。そして、その他に湯川英樹著『目に見えるもの』と、ポマード、下駄の鼻緒、藁半紙の此の粗末なノート二冊を、貧弱な財布をはたいて買って来た。

早速今日から、この帳面に日記をつける事にする。

カボチャの種

脂肪に富むカボチャの種は、支那料理では高級料理の材料だと聞いた。本当か嘘か。

夕食後、捨てずに取っておいたカボチャの種に、塩をちよつぱりまぶし、七輪の上の鍋でこんがり炒めた。

箸で一粒つまんで、口に運んでみる。舌の先にかすかに塩の味がする。堅い皮を二、三回ゆっくり噛んでみる。すると、とろりとした種の中身が、舌の奥に油の匂いと共に流れ込む。

一種独特の風味だ。二、三粒毎に一口の湯を口に含めば、しつとりとした味わい深い感触が口の中に残る。

この日記に見るように、時には心温まる一刻もあったようだ。そして医学の講義を受けながら、ヒルティや湯川秀樹教授の著書に親しんで、漠然と「美」の意味について考えながら、別のノートに、「美と善悪」と題する次の一文を残している。

今まで、美と善悪について、はつきりした概念をつかんでいなかった。

例えば、美なるものが全て善に通ずるとは思えなかった。しかしヒルティは、「本来、美が善に通ずる事が理想である」と説いている。

現今まで、自然主義的若しくは唯物論的芸術は、我々の五感によつて得られる美的感覚を至高至大のものとした。従つて、享樂的快感も美として許容される事もあり、更に美しい空想はそのまま美術なりと言う理想主義も肯定された。しかし、そこに現在までの芸術の限界があるのではないか、ともすればその中に心理的な苦痛或いは良心の呵責さえも含まれるのではないか——と。

恥ずべき事ながら、僕自身もこの人間的弱点を「美」と

いう隠れ蓑にすりかえて、生きていのではないか、時々そんな反省の上に立たされる。我々は、日常もつと理性的に行動しなければいけないのではないか——と。

芸術は、結局は人格の発露でなければならぬと思う。その為には、その人の知情意の三者がうまく調和された人格形成が必要であらう。

我々の理想の根底には、この美しい調和が必要である。湯川秀樹氏の言を借りれば、現実は全く矛盾であり、不完全である。しかし、その根底の中には必ず完全なもの、即ち真がある——と。達人のみがそれを洞察し、真の詩人のみがそれを感じる事ができる——と。その真なるものが美であり、真・善・美の一致こそ、我々の理想に適うものでなければならぬ。

私も、混沌とした現実のなかに、真に真なるもの、真に善であり美なるものを求めなければならない。

《七月二十六日の日記》

午後から街をさまよう。

古本屋でシュトルムの短編小説の原書を買ひ、玉屋デパートでリーダース ダイジェストを買う。古本二冊を三十円で売り、その金で買ったものだ。残りの金で喫茶店に入った。菓子つきのコーヒー七円五十銭、代金を支払ったら

持ち金がほぼ無くなる。

今の世相では、物は買えない。高過ぎる。むしろ売るとき時。去年、六百円で売ったラウベルの解剖書が現在二千円。凄いいんフレだ。しかし、今売るべきものは何も持たない。

リーダース ダイジェストはアメリカで出版される雑誌。世界の八ヶ国で、それぞれ翻訳されて販売される。世界の四十あまりの国民に読まれている世界有数の国際雑誌である。内容は、世界の著名雑誌の中から抜粋し要約したものが多く、私が喫茶店で拾い読みしていると、イギリスの著名作家アーノルド・ベネットの「二日二十四時間の生活法」と言う題名が眼に飛び込む。

僅か五、六頁の要約された小論文が、深い感銘を与える。結論は、忍耐と強い意志で読み且つ考えた事が、実は後になって塵も積もれば山となる——と言う内容。流麗な筆致で具体例を挙げて述べられた文章は、多分に余韻を持たせながら私の気分を沸き立たせる。つまり、諄々と生活時間の合理的な用い方を説くのである。

私は、家に帰って早速実験してみようと思った。対象を今日買って来たシュトルムの小説としよう。彼の論に従い、結果を無視して先ずゆるやかなプランを練らねばならない。

私の場合、日曜日を除いて毎日半時間ずつそのドイツ語の翻訳に当てる事にした。十日で五時間、一ヶ月で十五時間、一年で一八〇時間、忠実に実行すれば何とかなるだろう。早速今夜から始めよう。記録はこのノートに――。

夏の日脚は長くて暑い。夕方の六時になつても、未だだらだら汗を流しながら、うんうん唸っている。

巷には、市場がはびこり、復員軍人や闇商人が闇物資を並べて人を集めていた。人だかりを縫つて戦争孤児が駆け巡り、派手なドレスの女性たちが米兵たちに媚を売っている。終戦まではモンペ姿に防空頭巾をかぶり、なりふりかまわず軍需工場で働いていた女性たちである。

私は、家族とのしがらみや寄宿舎の友人たちとの交わりのなかで、「愛」とは何か、「道德」とは？と言つた思念にかられるようになった。ノートの中に次のような原稿も残している。

「愛と道德」

「愛」とは広い意味で、人間の本能に基づく全人格の総合的な現れだと思ふ。

愛の最も素朴で原始的な現れは、生存本能として出現す

る。見よ、子供を育てる動物たちの本能を。彼らは、あらゆる危険から身を挺して、我が子を守ろうとする。

動物もそうだが、人間の場合、それ以上に育児本能が強い。これは本能的な「愛情」の表現である。

「愛情」の表現は対象の違いによつて変化してくる。肉親に対する親愛の情、友人たちへの友情、威勢に対する恋愛感情など。そして人によつた特異的な愛の表現がある。愛の表現は、身体精神機能の全てのエレメントを包含したものである。その根底には、生物としての本能が潜んでいる、と私は思う。私は仮にその事を「愛本能」と名付けよう。「愛本能」は動物に生来備わっているもので、必ずしも情緒を伴うものではない。

呱呱の産声をあげた胎児は、出生と同時に活発な生命現象を発揮する。それは脳細胞の構成する本能に基づくもので、第一に挙げるべき本能は食欲であろう。その後、脳細胞の分裂増殖により感覚機能が発達し、認識能力が向上する。その結果、知識欲が生まれ所有欲が加わる。身体の發育は本能を発達させ、青年ともなれば性欲を刺激する。

つまり、人間は成長するにつれて感性とか認識能力とか意志が働くようになる。「愛本能」は感性の一部だろうが、成長するにしたがつて感情を伴うようになる。それは生命活動の必須条件であり、知識欲や所有欲も関与する。

例えば、幼児が人形を気にいり、それを自分のものとして可愛がる、そこには愛本能が目覚めて所有欲が湧いて来るのである。それは母親が自分の赤ん坊をいとむ心境に近い。

それぞれの本能と本能の間には相關するものがある。その中で人や物を慈しむ感情を私は勝手に「愛本能」と名付けている。こうした本能を足場にしながら、更に人間は成長する。認識力は大人より小なり発達し、意志の力も高まる。感情は更に繊細となる。

この場合、本能を刺激する環境の変化が、その人の性格を特徴づけて来るだろう。何故なら、性格とはその人の理性とか血性とか意志が環境の変化によって融合されてゆく人格の現れだからだ。環境の変化は、脳細胞の発達にも深くかわる筈で、その為に性格が歪められる可能性もある。例えば、山中で父親とたった二人で暮らしていた子供が、少年時代に父を失ったとしよう。彼は茫然自失してなす術をもたない。彼の心を癒すものは、深い森林と青い空しかない。ときには、鳥獣の鋭い声が彼の胆を冷やす。しかし時間とともにお腹がすいてくれば、仕方なく谷の水を飲み、食を探して山の中をさまよう。そんな場合、彼の唯一父に対する「愛本能」は、環境に対してどんな風に変化していくのだろうか。

生前の父との生活で、僅かに知り得た自然の恵みを求めて、最大限の智慧を働かせねばならない。火を起こし薪を燃やして、父の残した獣肉を焼いたりしながら、飢えをしのぐ事になるだろう。木の実を拾い、食用になる草や木の根を求めてさまよう。網で谷川の魚をすくって食用にする事も工夫せねばならない。

その間に、天候の変化を知り、自然の移り変わりの中で何とか生活せねばならない。一人で成長していても、自然から教えられる事が多くなり、森や川を友として暮らさねばならない。そのうちに鳥や栗鼠など動物たちに愛情を感じる事になるだろう。彼は自然児らしい特異な性格を持つことになる。

彼は、普通の人間が受ける教育の経験は全く無い。そんな場合、彼の知性や理性はどのように変化していくのだろうか。

普通の人間社会と全く違った環境に置かれた彼の場合、愛情の対象も異なり、表現方法も全く違ってくるに違いない。かつてのアメリカ映画の「ターザン」のように――。我々の世界は、理性の発達によって道徳観念が生活様式を強く束縛する。彼の場合、自由奔放に生きてもいい筈だが、そこには自然の摂理があつて、それに反する事があれば手痛い自然の攻撃を受けることも考えられる。

人が精神的にも肉体的にも、順調な發育を遂げたとして、成人の域に達した頃には、知性と感性と意志はほぼ調和した状態で密接に結び付いてくる。そして形而の上下を問わず、今まで認識し記憶に残した数々の物事の間に、いろんな觀念が生じる。その觀念を基本として、さらに新たな認識が加わり一定の觀念が構成される。その觀念を基に、現実的な道徳律が構築されていくのである。

つまり知性によって認識されたものも、意識下に隠されている間は觀念と呼ばれ、ある形で言い表されるようになった時、初めて概念と呼ぶのだろう。

愛という感情の表現は、ある觀念のうえに成り立っているものと考ええる。その本質が「愛本能」の上に成り立っているとしても若しその人の愛情が知情意の理想的な調和の上に成立していれば、その人の愛情表現はとも美しいものになるだろうし、輝きを増すだろう。若し不調和の上に立っていたら、いびつな愛情表現となって、場合によっては変態的な行為ともなりかねない。また人間の道徳律にも相反することにもなりかねないだろう。

街の中で戦争孤児を見かけていると、そんな考えが浮かんできたのだろうか。

戦争孤児

少年たちはぼろぼろの服をまとつていた

蓬のような頭が、吹き出物で白けてみえる

孤児の中には 下駄をはいている者

草履をはいている者 そして裸足の者

孤児たちの汚れたシャツは虱だらけ

ぼりぼりと体を引っ掻く

孤児たちは しかし元氣

叫び 泣き 笑い 媚び 睨む

町中飛び回り そして寝転ぶ

闇市の群集をかき分けて 孤児たちは駆け巡る

中にはいたずらをしたり 子供をいじめたり

年長の孤児は 木の小箱を抱いていた

彼らの大事な商売道具

靴クリーム 靴刷毛 汚れた布

彼らは群衆の中から 汚れた靴を探し出す

(いたいた) 比較的身なりのいい小父さん

「靴が汚れているよ 磨いてあげるよ 小父さん」

孤児は 服の袖を握って放さない

わき道に箱を置いて 客を立たせたまま足を箱の上に

汚れた布でさつさと泥を拭き取る

クリームをつけて刷毛で磨く
もう片方も終えて「二丁あがり」
孤児はお金を貰ってポケットに仕舞う



今日の飯代だ

それは彼らが生きるための唯一の手段
戦時中の防空壕が彼らの住まいだった

盲人の笛

深々と 夜のとばりに 溶けいりてそぞろ悲しき盲人の笛
なまめける街の狭霧に流れける笛の音しどろに濡れてあらずや
さすらいの旅にすれば笛の音も哀れなりけり夜更けの街は
動くとも分かつたぬ雲のいつの間ひろこりて秋の空かな
きらめける霧のかなたを見つめれば過ぎにし思い広がりてゆく

《八月二十六日の日記》

此の夏休みの間、ずっと家に帰っていたのではなかった。
暫く港の検疫所で引揚者の検便実習をした。そこで、何人か
の看護婦さんと知りあいになった。皆目を見張るほどのお転
婆揃いだったが、京都師範中退の山口さんや、矢野さん、婦
長さんは無口でおとなしかった。山口さんと矢野さんは仲が
よく、暇な時は静かに読書していた。

山口さんは色白で小太りだったが貧血で倒れる事があると
いう。その翌日、私の部屋を訪ねて来た。その時、ヒルティ
の『幸福論』を借りて行った。矢野さんは、面長の幼顔だっ

た。色は浅黒かったが、漆黒の瞳にはいつも笑みが漂っていた。

一週間程、検疫所に通ったが、そのあと復員軍人の列車で大阪まで行く事になった。車中診療の手伝いだった。終戦後、初の長旅である。大阪での滞在は慌ただしく、闇市の洪水のような人だかりと、目の飛び出るような高い商品に驚きの目を見張った。

夏の実習期間中は、一人でほそぼそと日々炊煙の生活だったが、心の満ち足りた気分で、心行くまで顕微鏡を覗く事ができた。それは、私の研究心を煽り立ててくれたし、思索の時間も十分に与えられた。

実習のあとの十日あまりはB君と一緒だったが、K先輩とも良く逢ったし、唯一の女性同級生のY君や、女専の生徒さんたちとも短期間接する機会もあった。

B君とは大いに議論したり批判しあったりしたが、僕らは相手の言をよく聞き理解しあうことが、その人を愛する道であり、よく認識することだと言う結論に達した。それは、優れた一つの収穫だったような気がする。

此の八月中に起こった最大の不幸は、実父良二の発病であった。役員として経理担当をしていた会社が倒産に追い込まれて、責任を感じた父は心痛のあまり神経を擦り減らし、おまけに胃潰瘍になった。私が実習を取りやめて家に帰ったの

も、そのあたりの事情による。里の養父も、長年の病気で殆ど治療をやめ暗い居間の火鉢のそばで、じっと長年の宿痾である胃痛をこらえている有様だった。

だから、家での生活は惨めで、私が望んでいたプランは全く実現できず、むしろ最もおそれていたことが真つ先に訪れたと言っ感じだった。

日ごろ私が願っていた事は、もつと自然とともに呼吸する事だった。私は私一人になって瞑想的な生活を送りたかった。山や谷や小川の辺りを一人で散策し、夢をみたり本を読んだり思索にふけったり——しかし現実はそのを許さず、食料不足など世俗的な家庭事情に振り回されて、抜き差しならない環境に置かれていたのだ。

私は、この間にN先輩から二通の手紙、O先輩から一通の葉書ももらった。

Nさんは、医学部卒業間際の先輩で寮で同室していた。私の相談に良く乗って頂いた。

Oさんは工学部の学生で、私が一番最初に下宿していた同宿の先輩で鹿児島出身の方だった。この方たちの便りは、私を最大限に慰めてくれた。又、里に帰省している同級生のTと共に、ドイツ語のH教授(当時助教だったか)を訪れた事も収穫の一つだった。しかし、ドイツ語の試験の結果たるや惨憺たるもので、内心忸怩たるものがあつたが——。

《八月二十七日日記》より

日々物狂おしい心境である。

己の生が自然を求め、孤独を求めて止まないのは、単に俗界の塵埃を逃れる為ではない。生が己の主となりたい為である。静寂の内に、自分の生の姿を見極めたい。

悶絶しようとする魂を一気に解放したい、それだけである。

宮本武蔵は瞑想の中に自分の姿を見極め、僧日蓮は自ら苦難を求めてさまよった。ヘルマン・ヘッセが求めたものは何か、釈迦牟尼(シツタルダ)は何で忍従の苦行を重ねたのか。今、私が求めて止まない友は、山であり谷であり、谷川の水のささやきである。林間からもれてくる朝日、亭々たる老樹の堅い肌を当てて、千古の史を聞いてみたい。

山の中で、荘厳な朝ぼらけを迎え、老鶯の呼びかけに天の声を聞きたい。

山霧は谷を這い林間に漂い、そして私の魂を包み隠す。

私の生が浄められ、狂おしい血潮が静められたら、美しい女神の姿を拝する事ができるかもしれない。

しかし、現実を見よ。巷間の義理人情の狭間で、悶々ともだえる私の生。

情感は薔薇の刺のように私の心を突き刺し、家族のしがらみが蟻地獄のように私の心を砂の底に引きずり込もうとして

いるのだ。

《十一月三日日記》より

現在の自分の気持ちを言い表す言葉を持たない。

自分の行ったことについて自問自答しても「お前は早まった事をした」と言う答と、「それで良いんだ」と言う答が交錯して、結論には行き着かない考えても考えても頭の中が混乱して考えるのが嫌になってくる。

人妻を恋したT、彼の行く先に悲劇が待っている事は間違いなかった。一度は諦めて、彼女が自分より有能な男性と結婚する事を許した仲ではないか。Tは卒業するまでに、まだ何年もかかる。Tの下宿先の娘さんだった彼女の結婚話の相手は、東大出身の有能な公務員だった。Tは将来を誓った相手ではあったが、彼女の将来を考えて諦めた筈ではなかったか。その後、彼女達は幸福な結婚生活を送っていたはずである。

運命とは皮肉なもの。実家の母親の死で婚家から駆けつけた彼女と、お悔やみに訪れたTが、かつての下宿先で出会ってしまったのである。彼女は結婚してまだ浅い年月日だった。

Tはまだ未練の残る彼女の幻影に、毎日悩んでいたらしい。焼け棒杭に火がついたように、二人の情炎はたちまち燃え盛ったようだ。Tはしきりに彼女に駆け落ちをすすめる、計画を練ったと言う。そしてTは私にもその計画を打ち明けたの

である。

それは無謀な計画だった。私はそのTを何とか思いとどまらせようと焦った。しかし、彼は頑として私の言うことをきかない。

私は思いあぐねて、郷里の実兄にその事を相談した。彼女の夫は、実兄の中学時代の後輩で実兄とは同郷の誼みであった。

直ぐに、実兄はその事実を彼女の夫に漏らしたようだ。その結果は明白だった。

彼らの駆け落ちの計画は直ぐに露見し、Tは窮地に立たされた。彼女もまた思い止どまらざるを得なかった。

Tはその後私を訪れて私を難話し、「お前とは絶交する——と。」

涙にくれるTを見てみると、むしろ私が許しを請わねばならなかった。「どうして」と、自問しながら——。

私は、私自身を信じたい。私のした事を信じたい。しかし、今まで何でも打ち明けてきた友の信頼を失いたくはなかった。本当は情熱的なそんなTが好きなんだ、その友情を手放したくないと思っていた。

しかし、彼のわだかまりは今日まで氷解することはなかった。同級生だった彼との交友は遂にもとは戻らなかったのだ。

いさかい

忘れたし忘れんかなやその思い悩み続ける愚かなる我
苦しめど尚苦しめど遂に我れ救われ難き男なりせば
泣きたきをこらえこらえて語れども尚我が友は許さざりけり

ふるさと

我が里の御船の山も雨に濡れ霧に包まれ心閉ざしぬ
長雨はうとましきかな納税に心痛める母のいらだち
長雨に読み漁りたる新聞紙積み重なりて東になりぬる
ワンピース踊る舗道のうら若き乙女の姿しばし夢見る
その昔狂い恋せし乙女なれ今晴れ晴れと歩道歩めり
行く夏を名残り惜しとは思わねど君と別るる秋の来にけん
野も山も梅雨にかすみて灰色ににぶる水面に田植る人あり

講堂の幻想

白粉が散る
つばきが飛ぶ
アルマチックやアルキール

うすら光の講堂は
サラサラサラとペンが鳴る
けだるきは朝の課業よ

酸化剤にはクロール酸

光と熱の触媒に：

髭は砂辺の松林

髪は河童の昇天か

思いははるか古里の

山や桜や丘の上

所狭しと舞い狂う

亀が手を出し頭出す

ポリサイクルフェノールの

ニトロ化ズルホ化ハロゲン化

ピカリと光る目の玉の

あな恐ろしや閻魔様

ああ悩ましき春よ春

湿りがちなる講堂の

ほのぼの白きシャンドリア

名誉教授の肖像画

八の字髭に睨まれて
化学の園の幻想よ

エピローグ

昭和二十二年八月二十六日父重篤の知らせがあり、急遽帰省する。

物思い静けきままに虫の音のすだくを聞きつ夜を更かしける
秋の夜を一人聞かまく虫の音のすずろに悲し父の枕辺
ひたすらに学の成る日を待ちぬらん親の願いの哀しくもあり
主まさぬ診察室の影さびて流行りし頃のカルテーの束
開業医の心わびしや老い果てて廃業めんと思えど決めかねし父
重湯など吸い難しとて細々と飯乞う父は哀れなりけり
激痛に呻きもだゆる父上の背を撫するより術なき我は
命断たば痛まぬものをと我が父のもだゆる時は如何になすべき
とくとくと帰学を迫る父上の震える声に我悩みたり
何げなく暇を告げる我が声に父はかすかに頷きたりしが

その年、十月十四日、父は遂に此の世を去った。

青白き月の明かりにはお骨の尖りて見ゆる病は篤し
永かりし闘病のあとの痛々し今年五十路の髪の毛の白さよ

第二次大戦の末期から戦後にかけて、私は社会的にも家庭的にも、徹底的に打ちのめされた時代だった。星の数ほどの人間の中で、私一人がどれほどの価値があるだろうか。私一人いなくても、あの流れ星のように誰ひとり関心をもつてくれないだろう。私は自分自身に全く自信がもてなかった。

孤愁

真つ赤な血潮の疼き

悪魔の叫び

悩ましき人生よ

金・金・金

札が羽をつけて飛んで行く

女よ 酒よ

はかなきモラルの世界

戦いに疲れたる国

冷たき街のほこりに

カフェも 料理屋も 売笑婦も

それから飢えたる男も

灰色の笑いばかり

いやしげなその目付きに

自嘲の色を湛えながら

アツハツハツ アツハツハツ アツハツハツ

.....

孤愁に悩む我

ああ悩ましき人生よ

飢えたる詩人よ

ともすれば心理的な重圧に、自分を見失いがちな青春の私を支えてくれたものは一体何だったのだろうか。今思えば、唯一私を理解してくれた女性が見つかった事、つまり現在の妻である。結婚後も苦しい事は多かったが、何とか後期高齢者の今日までたどり着けたのは、結局は妻の協力のお陰と言う他はない。

夜空を眺めながら、「我思う 故に我あり コギト エルゴ スム」と言うデカルトの言葉を思い浮かべながら、自己流に解釈しては納得し、自らを慰めた青春時代だった。

(おわり)